

火野葦平「象と兵隊」論

——兵士と象をめぐるインパール作戦の悲劇——

増 田 周 子

はじめに

火野葦平は、インパール作戦に従軍した数少ない近代日本文学者である。インパール作戦とは、第15軍司令官牟田口廉也中将が、日本軍のビルマ戦線を打開しようと考えた作戦で、連合国軍の拠点インパール滅亡を試みようとするものであった。大本営は、昭和一九年一月七日、「奇襲によって大勢の優越を期する」^①ことや、連合国軍の援蔭ルト壊滅を目的とし、インパール作戦開始の号令を出した。この作戦では、南方軍寺内寿一元帥、ビルマ方面軍河辺正三中将の下に牟田口率いる第15軍がおかれ、第15軍の下に「烈」(第31師団)「祭」(第15師団)「弓」(第33師団)の三兵団が編成された。^②「烈」は北方コヒマ方面を守り、「祭」は中央方面、「弓」は南方面からアラカン山脈を越えてインパールを目指すものであった。こうして三月八日から作戦が開始された。三兵団はチドウイン川を渡河し、またたく間に、ビルマ国境を突破した。四月五日頃までの初期は、日本が優勢であったが、インパールを制覇できないまま、次第に日本軍は追い詰められる。作戦実施は「天長節(四月二十九日)まで」^③とし、計画では雨期が来る五月以降は続ける気はなかったが、日本軍は打開策も見いだせないまま、だからだと七月三日まで作戦を続けてしまった。

長期化するにつれ、食料、物資が欠乏し、三師団だけで36245人⁵⁾という多くの餓死者、負傷者、行方不明者を出したのである。結果、インパール作戦は、補給線を軽視した杜撰で無謀な、死の作戦とも呼ばれるものになった。

火野は、昭和一九年四月二五日に飛行機で日本を出発し、陸軍報道班員としてインパール作戦に従軍した。途中、「弓」（第33師団）に合流するため、南方方面からインパールを目指した。火野は、このインパール作戦の従軍記録を『従軍手帖』に残している。そこには生々しいインパール作戦の実情が綴られている。例えば火野は、インパール近くで負傷し、下って来る兵隊たちの姿を見て「胸いたむ」とし、次のような光景を自身の『従軍手帖』の昭和一九年七月四日に記している。

まつ青な顔にぎよろりと落ちくぼんだ眼を光らせ、全身まつ黒に泥と雨とによごれ、両手に杖をついて、亀の歩みよりもおそく、一步一步をはこんで来る二人の兵隊。足にはなにもはいてゐず、異様な色にはれあがり、杖を持った手はまつ白に手袋をはめたやうにふやけてゐる。（中略）戦友の肩にすがつて来る全身血まみれの兵隊。うつむきかげんに杖をついてよたよたと来る兵隊の顔は原型をとどめぬほどに破れ、眼の下にも、唇の横もだらりと肉がぶら下つてゐる。道ばたにたふれてゐる兵隊たち。（火野葦平『インパール作戦従軍記』258頁）

見るも無惨な負傷兵の様相である。インパール作戦は、実際このように悲惨極まるものであった。

火野は、このインパール作戦の体験をもとに数多くの、小説、評論、エッセイを残している。それらはどれも貴重な作品である。

本稿では、その中からインパール作戦で利用された象と兵士のやりとりを描いた「象と兵隊」という小説をとりあ

げる。「象と兵隊」は、昭和三三年八月二八日『別冊文藝春秋』（第65号）に発表されたごく短い短編小説である。戦前にミリオンセラーとなった兵隊三部作、などのように、〇〇と兵隊という、火野葦平の名付けたシリーズの一環として、戦後に書かれた作品である。本作は、火野の作品集にほとんど収録されることはなく、『火野葦平兵隊小説文庫7』（昭和53年12月、光人社）のみに収録された。

「象と兵隊」は、発表当時から取り上げられることもなく、本格的に論じられたことはない。火野の友人でもあり、インパール作戦に従軍した棟田博が「解説^⑥」で簡単にとりあげるのみである。棟田は、「小説としてのできふできとは別に、私にとって興味深いのは『象と兵隊』である^⑦」と述べている。さらに続けて棟田は「太平洋戦争全域のなかで、敵味方ともに象を戦力に用いた戦場は、おそらくインパール作戦のほかにはないであろう。印緬国境の険しい山岳密林のなかで象がはたした輜重の役割、また道路と架橋に工兵として貢献した功績には、特筆すべきものがある。」と記す。象は古代から、戦争に用いられてきたが、インパール作戦では、棟田が記すように日本軍も、英軍も戦争に象を利用し、道路と架橋の工兵に利用するなどしていた。実際、火野も、「ビルマ戦線拾遺」で「象が戦場で大いに有数な戦力であることを知つた^⑧」と記し、自身の『従軍手帖』の七月八日には、「土屋中尉から、来るといふことは聞いてゐた、会ひたいと思つてゐた、象をたくさん使つて仕事をしてゐたので、あんなに象を見せようと思つてゐた、昨日、砲弾で象が一匹やられた」などと記されているので、インパール作戦では、象を実際に使つていたのでと確認できる。

本稿では、火野の残した『従軍手帖』と「象と兵隊」とを対照させて、いかに実体験と重なるのかを指摘し、そのうえで作品のテーマに迫りたい。なお、火野のインパール作戦の『従軍手帖』は、全文を翻刻した火野葦平『インパール作戦従軍記^⑩』を、また、「象と兵隊」の作品本文は、『火野葦平兵隊小説文庫7』をテキストとする。

一、象使いと二宮一等兵

「象と兵隊」は、インパール作戦も末期となった昭和一九年七月八日、退去命令が出たころの、小さな部隊のことを描いた小説である。作品には、一等兵二宮金三郎が登場する。二宮は、二宮尊徳と倅名され、戦争に似つかわしくなく、優しいのでいつまでも一等兵のままであった。二宮の部隊には、二〇頭の象がいた。そして象一匹、一匹に、ビルマ人の象使いがいた。象は「人間に馴れ、人間のいうことをおとなしく聞く」ので、「まったく有用な動物だった」。だからこそ二宮はいつも「象を可愛がる」ことばかりしていた。部隊には、既に全く食料がなく、兵士たちは鼠、蛇、トカゲ、ナメクジ、コオロギ、そしてダイナマイトまで食べていた。ダイナマイトはニトログリセリンで舌がひりひりするが「羊羹に似ていて、甘かった」からである。火野の『従軍手帖』五月三十一日に、

前線にダイナマイトを百キロおくと50キロしかないといふ報告が来る。兵隊が食ふのである。甘味があつて、羊羹より柔いし、切り餅くらゐの大きさで手ごろなので食べるのだが、食ひすぎると下痢する程度。

（火野葦平『インパール作戦従軍記』165頁）

とある。実際も作品中の記述と同様、ダイナマイトが甘いので食べていたことがわかる。このことが作品に活かされたのであろう。とにかくインパール戦争は悲惨な食糧事情であった。

作品には二宮と対称的な「意地がわるく、ひどいエゴイスト」、かつ「狡猾」な三富安造軍曹が登場する。三富は二宮と同年兵であったが、軍になじむ性格でとくに二階級も二宮を追い越し、軍曹に昇格していた。ある日、三富

は、ミーモという名の象の牙を切り取ろうとした。上官が象牙のパイプを欲しがっていたので、それを作ろうと思ったのである。三富は、軍で特別な配慮を受けようと上官に忖度していたのであった。

火野のインパール作戦『従軍手帖』に「○象のはなし」があり、「象が通ると歩哨が通行税とて象牙を切る。片方だけのやら、ないのやらある。痛くはないらしい。」「兵隊、象牙で将棋の駒、碁石、パイプ、はしばこなどを作る。」とある。象牙は価値があるので様々な用途に使われていた。実際にインパール戦で見聞きしたこれらの象のエピソードを作品に用いたのである。

結局、二宮の反対は聞き入れなかったが、二宮は象を擁護する発言をしたので、象使いらに親しまれ、信頼されるようになった。作中には次のような象使いの描写がある。

象を操縦する。手に、魚屋の持っている手カギのようなもの、あるいはダーと呼ばれる長刀をにぎっていて、それで象の頭をガリガリとひつかいたり、ゴツゴツとたたいたりする。それでもいうことを聞かないときには、広い耳を扉を開けるようにめくって、耳の中をそれでかきまわす。頭のとっぺんも耳の内側も傷だらけで血がにじんでいる。痛いにちがいがなく、細い眼に涙をためている。それが宝石のようにキラキラ光って落ちることがある。それでも怒るふうはなく、黙々として象使いの意のままになる。（『象と兵隊』219頁）

この作中の描写と酷似した話が火野の『従軍手帖』にある。火野の『従軍手帖』「○象のはなし」には「象使ひは象が動かぬときには手鉤で頭をたたく。ちかつとするらしい。それでもきかねば耳の下のところを突くと、怒つて力を出す。」さらに火野の『従軍手帖』「○象のはなし その二」には「首筋ノ上ニノルトナニモシキラン、象ヅカヒ

ハダーデ頭ヲタキ血ダラケニスル、象ポロ／＼涙ナガシ泣ク」とある。實際、象はこんな感じで象使いに操縦されたのである。二宮は、象使いに「もつとやさしく扱ってやったらよいではないか」と言う。象使いは「こうするか、象を操縦する方法がない。(注略)みんな象を愛している」と述べた。象のために象使いたちの操縦方法に抗議したことで、ますます二宮はビルマ人たちに特別に印象づき、慕われることになった。また、二宮は、次第に「象の楯」になろうとするなど象の命を大切にし、いつしか「象と生死をともしする運命」になっていったのであった。

二、二宮一等兵の軍批判

「象と兵隊」には、二宮兵士による軍上層部批判が随所に描かれる。師団作戦参謀の加島中佐は、「兵隊を虫けら同然」に考えていた。加島は、兵隊を「足蹴にして傲然と通りすぎ」、大隊長と酒を飲みかわしながら、戦争に「『兵隊をつぎこんでしまったが、まあ、仕方ないさ』といって、ゲラゲラ笑っている」。それを聞いて二宮は「こんな参謀を象の足で踏みつぶさせてやりたいと思つた」。「多くの兵隊がむざんな目に会つたのは、とりもなおさず作戦が当を得なかつたためではないか。」と、怒りで身体がふるえた。戦時中に描かれた作品では、このような一等兵が軍上層部の作戦を批判するなどの描写はありえない。なぜなら、内務省の検閲、ならびに軍の検閲どちらでも問題とされるからである。ちなみに葦平自身が記した、当時の軍の禁止事項を簡略化してあげると次の七項目である。

第一、日本軍が負けているところを書いてはならない。

第二、戦争の暗黒面を書いてはならない。

第三、戦つている敵は憎憎しくしくいやらしく書かねばならなかつた。味方はすべて立派で、敵はすべて鬼畜でなければならぬ。

第四、作戦の全貌を書くことを許さない。

第五、部隊の編成と部隊名を書かせない。

第六、軍人の人間としての表現を許さない。分隊長以下の兵隊はいくらか性格描写が出来るが、小隊長以上は、全部、人格高潔、沈着勇敢に書かねばならない。

第七、女のことを書かせない。

火野葦平「解説」(『火野葦平選集第二卷』¹)

以上のような項目を戦時中は守らねばならず、かなりの制約を小説の表現描写に受けていた。だから、本作では、二宮一等兵の心理が赤裸々に綴られる。作品では、二宮は次のように述べた。

弓兵团の方では、前線から引きかえしてきた、亡霊のような兵隊たちが、瀬川軍司令官暗殺を企てたというような噂も聞いた。彼らは、おれたちの眞の敵は英印軍ではなくて、軍司令官だといったという話だが、その気持が私たちにもよくわかる。(『象と兵隊』220頁)

火野の『従軍手帖』に以下のようにある。

牟田口閣下は毎日粥を二度食つては毎日釣りをしてゐる。今度の作戦の責を負つて自決するのではないかと見てゐる者もあり、また兵隊のなかには牟田口を殺すといきまいてゐる者もある。

(火野葦平『インパール作戦従軍記』323頁)

実際に、牟田口軍司令官を殺したいという兵士がいたのであろう。だが、火野は『従軍手帖』にこのような事実をこっそり記せたとしても、戦時中は作品には描くことはできなかった。「象と兵隊」には、戦時中の戦争文学には描くことのできなかつた、軍批判や軍の上官への批判が露骨に出ていて興味深い。

三、象の描写と火野葦平『従軍手帖』

作品には、象の性質や立派な働きが描写される。例えば以下の描写だ。

象ほど小心で、注意深いものはない。臆病といえるほどだ。図体は大きいけれども、あの小さい眼はいかにも神経質に光っている。橋をわたるときなど、けっしてそのままわたらない。橋が自分の体重に耐え得るかどうかを調べるように、かならず長い鼻の先でコンコンとたたいてみる。石橋でも、鉄橋でも、むろん、たたく。おまけに、自分よりも小さい象が渡つたのでは安心できないらしいので、大きい象から先にわたらせねばならない。

〔象と兵隊〕221頁

この描写も、火野の『従軍手帖』「○象のはなし その二」に、「象ハ用心ブカク、橋ヲワタルトキニハカナラズ鼻デタタイテ見ル、門橋デワタサウトシテモ、鼻デオサヘテ乗ラヌ大キイ奴ガ先ニワタルトワタルガ小象ガワタツテモワタラナイ」とある。実体験が作品に活かされているのであろう。さらに、二宮はこう述べる。

象ほど手のかからぬ動物も少ないであろう。あの大きな身体のくせに、食糧といつてはジャングルのどこにでも

ある竹の葉、タケノコ、バシヨウの茎などでじゅうぶんで、肉食はしないのである。そのせいであろうが、尻も臭くない。あるとき、昼寝しようとうツラウツラしていたら、サアツと風が顔にふきつけて、木や笹の葉が散りかかってきた。(中略) ジャングルはむし暑く、そよとの風もない。見ると、すぐ顔の前に象の尻がある。放屁を一発くらったものだとわかった。(「象と兵隊」222頁)

火野の『従軍手帖』「○象のはなし その二」に「象ノ尻ハクサクナイ、ナニカサーツト風ガ来テ、木ノ葉ガ散リ、笹ガユレ、頬ニアタツタノデ、風トオモツタラ象ガ尻ヲタレタノデアツタ」とある。このエピソードを作品に使ったのだらう。「○象のはなし」に記された「竹林にほりこんどけば何でも食ふ」「竹の笹の根を好み、食事が長くかかる。」などの様相も作品にうまく用いていると考えられる。

斜面をのぼるときは、人間と変わりはないが、くだるときには前肢をのばして突っぱり、後肢は、人間の坐ったようなかつこうにかがめて、いつきよにすべり降りる。(中略) 大砲や、トラックが崖下に落ちてても、チェーンか鎖かをつけて、象にひっぱらせると、玩具のように軽々とあがってくる。まったく象のために、どれだけ助かったかしれなかった。(「象と兵隊」221頁)

この描写も火野の『従軍手帖』「○象のはなし」にある「急坂を早く上り下りする。降りるときは後足を折り、上るときは前足を折る。」や、「トラックなど引きあげて半輪(ハヤ)させる。」を作品に活用している。

戦争は長引き、二〇頭いた象は、砲弾で倒れ、食料となり七、八頭にまで減った。象使いのウチン・モーも砲撃で

あつてなく死んでしまった。象や象使いが砲弾に倒れるというのも、実際のインパール作戦どおりであり、「日本軍に協力したウージイ（象つかい）と象の数は、おそらく一〇〇〇をこえたであろう。彼らもまた砲火にたおれた」とある。ビルマは小乗仏教国なので、ビルマ人が殺生をすることは悪である。邪魔になり、飢えを凌ぐためにとうとう日本軍が象を殺しはじめた。ビルマ人は、象を口にすることは決してなかった。象を殺して食べるのが嫌で、生き残ったビルマの象使いは申し合わせて全員逃亡してしまった。象使いが全くなかったのである。こうして、象は日本兵が動かすしかなくなってしまった。

四、象と二宮一等兵の渡河

戦争はいよいよ窮迫し、前途には希望がなく、ただ「暗黒の死」だけが待っていた。二宮は、象ミーモの係を志願した。しかし、すぐ大切なミーモが食料にされそうな胸騒ぎを覚えた。「いつ食べられる、それは時間の問題であった」。ある日、二宮はミーモを連れてジャングルに行き、そこに置き去りにしたのであった。だが、次の日の朝、ミーモは戻ってきてしまった。二宮はマラリヤに罹り、このままだとうせ死ぬと思った。ミーモの背中に揺られながら二宮は「のたれ死にしないうちに、どこかできれいに死にたいと思うようになっていた」。ある時、部隊はチンドウイン河の支流を渡らねばならぬ事態となった。加島参謀は、象を捨てるのは惜しいので、肉にしようかと提案する。二宮は「待って下さい」と頼んだ。二宮は、

象は川を泳ぐ。象使いが背中に乗って、鼻を両手でつかまえて、河に入る。象の身体は水に沈むが、鼻だけは出るくらいに浮く。そこで、人間がその鼻で舵をとって対岸へ誘導するんだ。（「象と兵隊」227頁）

と述べた。三富軍曹は、象に河を渡らせることなどできるわけないと笑ったが、二宮は渡河のための象使いを「おれがやる」と申し出た。ただ二宮も本気で河を渡れるとは思っていなかった。二宮はミーモと死ぬつもりだったのである。こうして、いよいよ二宮とミーモが河を渡る日がやってきた。

ミーモは泳ぎはじめていた。ウチン・モーのいったのは嘘ではなかった。私はあわてて、方向を対岸に向けた。象は水面すれすれまで身体を沈め、四つの肢を動かしているらしい。かなりのスピードだ。河の流れのため、すこし下流に流されたが、まもなく、ミーモは私を乗せたまま、対岸へ泳ぎあがった。(中略) そうして、部隊全員と六頭の象全部とが無事に渡河したのであった。(「象と兵隊」227～8頁)

火野の『従軍手帖』「○象のはなし」には、象を「泳がせてみた。泳ぐ。また、底を歩くと、身体全部水に沈み、鼻だけ上に出してゐる。乗つてゐる男がその鼻をつかんで行く。」と書かれている。火野は、「象が川を泳ぐかどうかは遂にたしかめることができないでしまった¹³⁾」と記しているので実際は見たことはないのだろうが、「ある象使ひは泳いだことがあるといった。象を川のなかに入れると、全身は水につき、息をするために鼻だけを水面に出す¹⁴⁾」とも記している。象は、実際泳げたらしいが、それを象使いから聞いて『従軍手帖』に書き記し、エピソードとして作品に使っている。

ミーモは、無事、渡河することができた。しかし二宮は生き延びても満足しなかった。

たちまち、私は英雄になった。なんたることかと泣きたかったのに、虚妄の名声ははびこるばかりで、加島参

謀などは、軍司令官の耳に達したから感状が下るかも知れんぞと、私にいった。なんの感状をくれるというのか。死にたかった私は死にそこない、それからは機会を失った。(「象と兵隊」228頁)

二宮は、実に人間らしい人物で、自分の兵士としての功績など興味なかった。兵士としての名声はあくまで、「虚妄の名声」ととらえていたのだ。この二宮の心理描写も、戦中には書けない、生々しい本音である。

五、象ミーモ殺戮から食料へ

作品は、部隊全体の渡河というハッピーエンドでは終わらない。敗戦の凄惨さはその後も加わるばかりで、食糧はどんどん欠乏した。ミーモがとうとう食糧にされ、二宮も食べるようになった。

ミーモが食糧として料理されたとき、飢えていた私はその肉を拒否する力はなかったのである。あとで猛烈な下痢をしたけれども、ミーモは私の命を支えた。(「象と兵隊」228頁)

戦争とは、本当に悲惨である。人間は、空腹には勝てないのだ。だが、二宮はミーモに救われた。二宮は、どんなに象ミーモを大事にしても空腹に勝てず、とうとう部隊はミーモを殺す提案をし、二宮も逆らうことができなかつたのである。確かに作中にあるように「空腹とは悲しいものである」。象がインパール作戦で兵士たちの食料とされていたことも事実であり、火野は兵隊から聞いた話として「象一頭は三個中隊一箇月を賄ふことはできるだらう。それでもこれまで苦勞をともした象の味はあまりよくないと兵隊は述懐してゐた」と述べている。大事にしている

象を、自らが生き延びる為に食べなければならなかったその無念さが伝わる作品の終わりである。

六、七月八日の退去命令

さて「象と兵隊」が、軍の退去命令が出た後の七月八日頃に設定されている点は実に興味深い。実際には大本営が、インパール作戦中止を認めたのは七月一日で、二日に南方軍が正式に中止をみとめる軍令を出す。牟田口中将はこの軍令を五日に受け取ったが、「パレル攻略を予定どおり強行することが方面軍の意図にそうものであると判断した¹⁶」。そのため作戦中止ではなく、あくまで作戦変更ととらえパレル攻略に全力を注いだ。河辺方面軍は、七月九日、この牟田口のパレル攻略「計画の報告を受けて当惑し」、七月一日に「パレル攻略計画の中止を強く申し入れた¹⁷」。そして七月一二日、河辺は、新作戦計画一―七を各軍に示達したのであった。¹⁸ここで注意すべきは、軍上層部は作戦の中止を認めたが、その正確な内容を各軍に通達するのは、かなり遅れていたこと、そして、あくまでも戦争の全中止命令ではなく、新作戦への変更であるという点である。作中では、退却準備をしていたある日、不意討ちの夜襲を受け「十数人を失い、数頭の象を殺した」シーンが描かれる。そのうちの一头は「加島中佐と沢谷中尉との楯になったため、機関銃を全身に受け、蜂の巣のようになって死んだ」のであった。早めに戦争の中止をしていれば、象が犠牲になつたり、これ以上兵士たちも無駄に死ぬことはないのに、軍の上層部は戦争をやめはしなかった。これも実際と同様である。作中には、皮肉な将校が「兵隊は虫けら同然の消耗品」と言う場面があるが、軍上層部にとっては、下級兵士の命も、象の命も尊いものではなかった。兵士や象などは、単に戦争に利用すべきものにすぎない。棟田博は、次のように記す。

「象と兵隊」を読みながら私が思い出したのは、転進という名の退却にうつったとき、とある路ばたに見た象の墓である。「忠象ホーギー之墓」とその墓標には書いてあつて、工兵架橋班有志之建としてあつた。だれが供えたのかゴエパンの白い花が手向けてあつて、私の眼頭を熱くさせたことであつた。

（棟田博「解説」『火野葦平兵隊小説文庫7』270頁）

インパール作戦では、戦争の犠牲となつた象が数多くいて、軍上層部の考えとは別に、戦闘で前線に行かされた下級、中級階位の兵士たちの手で、手厚く葬られていた。多くの象が犠牲となり、象によつて兵士等は助けられた。兵士たちは、象の死を無駄にしないと、墓を造り、象に感謝し、哀悼していたのである。だが、多くの象を犠牲にしても、その先には何も残らなかつた。空しさと辛い現実や記憶があるのみであつた。

終わりに

本作は、象の有様を描き、象を愛する二宮一等兵を通して、戦争の悲劇を浮かび上がらせ、生き物に対する慈しみの情や、尊ぶ心を強く訴える作品となつている。どんなに象を愛しても、飢餓には勝てない人間の本性や、戦争の空しさが描かれている。作中の、象の生態や、戦争の実態には、火野が体験し見聞きした実在のインパール作戦の戦況が用いられ、火野の『従軍手帖』と重なり合う部分があることもわかつた。火野は、『麦と兵隊』『土と兵隊』のように、〇〇と兵隊という作品シリーズを戦時中から著わしているが、戦後に描かれた「象と兵隊」は、戦争の悲痛な運命と、戦争を巻き起こし、長引かせ、惨劇を増大させた軍上層部に対する怒りの思いが赤裸々に綴られている。軍や内務省検閲がない中で、下級兵士の立場から自由に戦争批判が描かれていることは特筆すべきである。

二宮一等兵は、二宮尊徳と綽名された人物で、本作の主人公であるが、二宮尊徳には「奪うに益なく、譲るに益あり 譲るに益あり、奪うに益なし。」「復讐を尊むは未だ理を尽さざる者なり」¹⁹などの名言名句が残されている。二宮尊徳が言うように、武力で奪いあうことの空しさを本作は描いているのであろう。尊徳は「国家の盛衰存亡は各々利を争うの甚だしきにあり」とも述べる。慾にまみれ利益ばかりを追求していくことは、国家存亡の危機に瀕することにもなる。このように「戦争の暗黒面」を自由に描くことのできる火野の戦後の戦争文学は、戦前の兵隊三部作などとは違う異彩を放っているのだ。

注

- (1) 陸戦史研究普及会編『インパール作戦 上巻』（昭和44年7月、原書房）
- (2) 磯部卓男『インパール作戦』（昭和59年6月、磯部企画）
- (3) 『戦史叢書インパール作戦』（昭和43年4月、朝雲新聞社）
- (4) 大本営が、インパール作戦中止を認めたのは7月1日、2日に南方軍が正式に中止をみとめる軍令を出す。よってこの日から終結とするのが通例である。
- (5) 2に同じ
- (6) 棟田博「解説」（『火野葦平兵隊小説文庫7』昭和53年12月、有限会社興伸社）
- (7) 同右
- (8) マルタン・モネステイエ『図説 動物兵士全書』（平成10年4月、原書房）によると、「戦闘用の象は古代文明とともに現われ」とある。
- (9) 火野葦平「ビルマ戦線拾遺」（『朝日新聞』昭和19年9月23日）
- (10) 火野葦平『インパール作戦従軍記』（平成29年12月、集英社）
- (11) 火野葦平「解説」（『火野葦平選集第二巻』昭和38年11月、創元社）

- (12) 棟田博『壮烈ビルマ・インパール』(昭和48年7月、学習研究社)
- (13) 9に同じ
- (14) 同右
- (15) 同右
- (16) 陸戦史研究普及会編『インパール作戦 下巻』(昭和45年8月、原書房)
- (17) 同右
- (18) 同右
- (19) 二宮尊徳『二宮翁夜話一〜五』(明治17年11月10日〜20年7月20日、静岡県氏族中上喜三郎出版)
- (20) 同右